

## モデルコース⑥ モモ畑と歴史が紡ぐ栗原宿コース

栗原宿は、古くは栗原氏の統治のもと栄えた地域で、今もその名残と見られる寺院が多く残っています。また、甲州街道を通過して甲府での歌舞伎公演に向かう役者の影響から、村歌舞伎が形成された地域でもあります。明治40年の大水害の影響で、今は往時の町並みは見ることができませんが、モモ畑と寺院が織りなす風景を見ることができます。



大宮五所大神

栗原宿の北側で、問屋場や本陣、脇本陣といった宿場の中心施設にも近い位置にあります。社殿が舞台造りになっており、甲府に行く前の役者たちはここで芝居をして評判を確かめたとされています。拝殿には1772(安永元)年に奉納された、村芝居の一場面が浮世絵風に描かれた絵馬があります。絵馬の裏に書かれた記録から、栗原の村芝居仲間14名が二貫文を勧進し、この地に立ち寄った江戸絵師に製作を依頼したことが分かります。絵師の名前は不明ですが、この時代の浮世絵風の芝居絵馬は全国的にも珍しく、民間信仰を知る上で貴重なものです。



海島寺

1522(大永2)年に記された「菊陰録」によると、その時の住職は栗原氏の出身で尼僧であったことから、海島寺は創建に栗原氏が関与した尼寺であったと考えられています。武田氏との関係が深く、山梨市指定有形文化財の「海島寺文書」には、武田信玄と勝頼の禁制が含まれています。

## モデルコース⑦ 水とともに伝統と生活を育む石和宿コース

石和宿は、南に延びる鎌倉街道、南西に向かう市川道の分岐であり、笛吹川を通じて富士川水運へ連絡する船着場も置かれたことから、甲府盆地東部の交通の要衝として開けていました。甲州街道が通った江戸時代になると政治・経済の中心は甲府に移りましたが、八田家書院のような江戸初期の風情を伝える建物も残されており、風情を感じることができます。笛吹川と石和川に挟まれた低地にあつたため、古くから幾度となく水害に見舞われ、土砂に覆われた歴史があります。鵜飼川と呼ばれていた現在の笛吹川は、幾度にもわたって氾濫し、人々に水害をもたらし、町の様子を一変させています。

笛吹川の名前の由来には、水害の悲哀を語る伝説が隠されています。この伝説や謡曲「鵜飼」のゆかりを感じることができます。現在の笛吹川の遊歩道からは、周囲に連なる山々に谷筋が通り、甲府盆地に川が流れ込んで作られたお手本のような複数の扇状地を遠望することができます。



笛吹権三郎之像

笛吹川の名前の由来になった人物です。今から600年前、鎌倉幕府に追放され甲斐に逃れたという父を追って石和を訪れた、笛の名手の権三郎とその母がいました。ある日、近くを流れる子西川が氾濫して、彼らが住む小屋が流されてしまい、母が行方不明となりました。権三郎は笛を吹いて探すものが見つからず、疲れ果てて自身も川に流されてしまいました。権三郎が逝ってから間もなく、夜になると川の流から美しい笛の音が聞こえてくるようになったので、里の人たちは、当時の子西川を「笛吹川」と呼ぶようになったといわれています。



鵜飼山遠妙寺

創建は1390(明徳元)年と伝えられ鵜飼伝説にゆかりのあるお寺。鵜飼伝説とは、平安時代に、禁漁となっていた笛吹川で鵜飼を行い、罰を受け川へ沈められた者の亡霊が、法華経を全国に広める旅の途中に通りかかった日蓮上人と弟子に出会い、三晩の供養で成仏したという話です。この時日蓮が作った塚が遠妙寺の始まりとされています。室町時代に世阿弥元清が書いた有名な謡曲「鵜飼」の元になったとされています。寺の境内には鵜飼動作の墓を納めた鵜飼堂や鵜飼天神、動作の供養塔などがあります。



八田家書院

戦国時代に武田氏の蔵前奉行を務め、武田氏の滅亡後は徳川家康の庇護を受けた一族である、八田家が持つ書院。八田家は家康から3400坪の屋敷地を朱印地として与えられ、1601(慶長6)年、その一角に八田家書院が建築されました。この地域は古くから水害が多く八田家も何度か被災しました。1859(安政6)年の水害では母屋が使えなくなったことから、この書院が増築・改造され、住居として使用されていました。書院内は見学も可能で、襖絵に書かれた虎を見ることができます。書院横には石和の歴史と風土をモチーフにした八田御朱印公園があります。

モデルコース⑧  
いさわ いさわ  
石和宿

甲州街道、甲斐国21番目の宿場。甲府盆地東部の水陸交通の要所です。鎌倉街道との分岐点にあたるほか、甲府盆地と駿河を結ぶ富士川水運の船着場も置かれ、笛吹川を下って年貢米や物資が送られていました。葛飾北斎の浮世絵の「甲州伊沢晚(富嶽三十六景)」には、富士山と鵜飼川に向かって早期の石和宿を出発する旅人の様子が描かれています。